

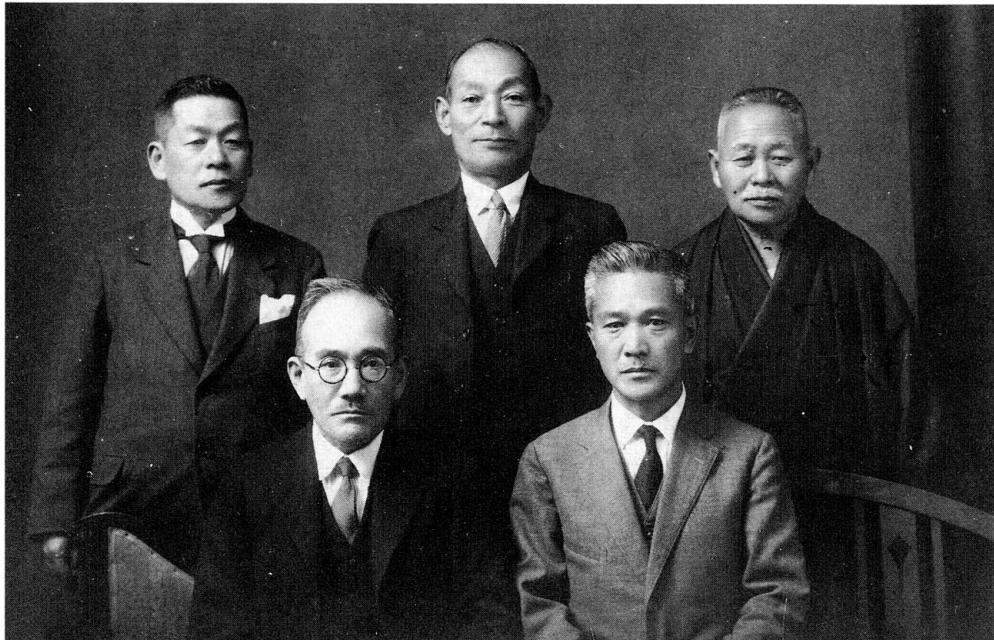
NEWS

# 開港のひろば

Number  
70

編集・発行／横浜開港資料館  
 〒231-0021 横浜市中区日本大通3番地 電話(045)201-2100  
 ホームページ <http://www.kaikou.city.yokohama.jp/>

発行日／平成12年11月1日(水)  
 印刷／中川印刷株式会社



横浜市史編纂完了記念。1933年（昭和8）4月20日撮影 加山達夫氏、中山春樹氏提供

横浜で市史編纂事業が始まったのは、ちょうど八十年前の一九二〇年（大正九）である。この間、未定稿の『横浜市史稿』、第二次大戦後に昭和恐慌期までの『横浜市史』を刊行し、現在はその後高度成長期までを対象とする『横浜市史II』の編集刊行が進められている。

当時の市長は、開港後六十年となり、古老や資料がなくなる前に市としての歴史を編纂して置きたいと述べた。そして、編纂主任には、早稲田大学講師の堀田璋左右が迎えられた。堀田は、東京帝國大学卒業の歴史学者で、既に名古屋市史編纂の実績があり、年俸三千円は助役並の高額報酬だった。統いて、文部省維新史料編纂官の大塚武松・竹村昌次、石野瑛らが嘱託員に任命された。大塚と竹村は東京帝大卒の文学士、堀田の後輩にあたる。編纂助手の石野は、現在の武相学園の創立者で、考古学での研究実績を重ねていた。編纂期間を大凡五カ年とし、外務・大蔵省、内閣記録課、維新史料編纂会、東京帝大史料編纂所、三井家などへの史

料採訪から着手された。開始から三年、関東大震災により膨大な収集資料と借用資料の一切を焼失して編纂は一頓挫したが、市は相談役会に諮って編纂継続を決定した。途中で主任は加山道之助に交代したが、一九三三年（昭和8）『横浜市史稿』全十一巻を刊行し終えて編纂係は解散した。震災の打撃は余りに大きく、完全なる市史の編纂は将来に期しての「稿本」であった。

上の写真は、編纂係解散の当日、委員たちの記念写真である。前列左が堀田、右が加山、尾上町の質店の主人で開港史料や郷土玩具の蒐集家、趣味人として知られ、風俗編を執筆・編集した。後列左から岡太郎、弦間冬樹、中山毎吉。それぞれ教会・産業、地理、仏寺・神社・教育の各編を担当した。弦間は一貫して市史編纂に関った市嘱託で、最もよく資料を涉獵、知悉した人。中山は、来浜前、長く海老名小学校長等を務めた教育者で、傍ら相模国分寺遺跡の研究と啓発で知られた。岡には、既に『神奈川県案内誌』（勧業協会、一九一三）等の編集実績がある。多士済溝な委員の面々である。

当館は、一九八一年（昭和五六）に終了した第一期編纂事業の成果をベースに設立された。館の収蔵庫には、戦後の収集資料に加え、大正期以降の編纂係が集めた資料、震災や戦災を免れ、幾多の障壁を乗り越えた資料が収まっている。資料を手にするたび、先人たちの地道な努力を思い、市民の歴史記憶の証であり、繰り返される歴史編纂の素材となる資料を保存することの重要さ、その役割の重さを感じている。

（佐藤孝）

# 企画展

## 「歴史を集めつむぐ人びと」展

### 二 冊 の 写 本 か ら

もう駄目です、吾々の手許で集めたものばかりでなく、市内の蔵書家といふ藏書家は悉く焼出されたのだから、再びやり直すにも材料がなくなつて了つた。材料の整理も略終つて愈々着手しやうと云ふ所でやられたのだから、泣くにも泣かれぬ程残念である。横浜ばかりでなく東京でも大藏省や通信省まで焼けて了つたのだから、我国の開港史は滅茶々々になつて了つた

大正九年（一九二〇）から横浜の市史編纂主任をつとめていた堀田璋左右が、関東大震災の後に残した悲痛なコメントである（『都新聞』（大正一二年九月二十五日））。大正一二年九月一日の関東大震災は、横浜の市史編纂事業に甚大な影響を与えた。この震災で三年間に収集した、史料複本約千冊、曾我部俊治氏蔵書約六百巻、加山道之助氏蔵書約三百巻、絵図錦絵三百枚、借用中の史料約千点を焼失したのである。また相談役の曾我部俊治と嘱託員の服部俊崖とを失った。

市史編纂の継続を危ぶむ声もあつたが、翌大正一二年二月一日の相談役会で、編纂継続が決定された。市当局を動かしたのは、次のような相談役の意向であった（『横浜貿易新報』大正一二年二月三日）。

今やらねば折角少しでも残つて居る資料が散逸してしまい、再び手

を下すことは困難にならうから、各所にある諸資料を蒐集し、是非編纂をつづける必要がある

#### 「市史稿写本」

編纂事業を再開した編纂係は、主に市内の旧家に残された古文書を調査し、その筆耕・謄写に力を注いだ。市の公文書をはじめ多くの基本資料を焼失したその穴を、江戸時代に名主・組頭などをつとめた家に残された村の古文書・記録によつて補おうといふのである。

これらの古文書・記録は、以下のようないきにそつて筆耕・謄写が行なわれた。旧家に残された資料は借用の手続きを済ませた上で、まず市史編纂係へ搬送される。次に編纂主任が筆耕・謄写すべき資料を取捨選択し、謄写生へ渡す。謄写生はそれを受取り、資料の筆耕・謄写を完了した後に、編纂主任へ原資料と謄写物とを提出する。編纂主任はそれらを編纂員に案配し、各々校訂を行う。校訂済みの原資料・謄写物は編纂主任に回付されて再度チェックを受けた後、原資料のみ旧家へすべて返却され、謄写物は製本されて「写本」となり、編纂の基礎資料となる。これから八年にかけて「横浜市史稿」全一卷が編纂・刊行されたのである。

「市史稿写本」は赤茶色の表紙を持つ和装本で、版心に「横浜市史資料」と印刷された専用紙を使用している。すべて行書体の墨書きで古文書の謄写がなされ、所々に朱筆で校訂を行つたあとが見える。末尾には所蔵者、謄写年月日、謄写者、更に校訂年月日、校訂者などが書き添えられている。

ここに紹介する二冊の写本は、「市史稿写本」のうち、「異船渡来記録 卷廿一」、「異国船渡來見聞録 出一」、という表題を持つものである。いずれも末尾に編纂主任の堀田が、写本の成立事情などを書き記しておられ、「市史稿写本」の中で極めてユニークな存在である。実はこの記述にこそ、横浜の歴史編纂事業の特徴が凝縮されている。

#### 「異船渡來記録」

まず堀田の記事か

ら見てみよう。

#### 「異船渡來記録」

いま一つの写本「異國船渡來見聞録」も、まず堀田の記載から見ていこう。

#### 「異國船渡來見聞録」

いまと一つの写本「異國船渡來見聞録」も、まず堀田の記載から見ていこう。

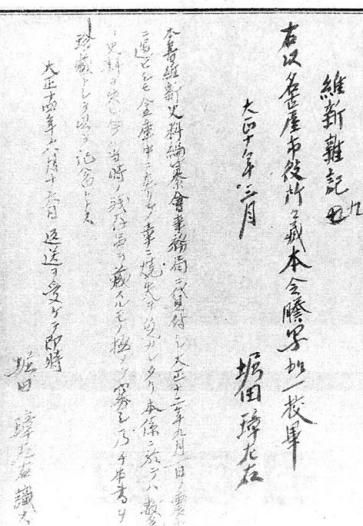
任に回付されて再度チェックを受けた後、原資料のみ旧家へすべて返却され、謄写物は製本されて「写本」となり、編纂の基礎資料となる。これが当館で所蔵している「(横浜)市史稿写本」で、これをもとに昭和六年から八年にかけて「横浜市史稿」全一卷が編纂・刊行されたのである。

「市史稿写本」は赤茶色の表紙を持つ和装本で、版心に「横浜市史資料」と印刷された専用紙を使用している。すべて行書体の墨書きで古文書の謄写がなされ、所々に朱筆で校訂を行つたあとが見える。末尾には所蔵者、謄写年月日、謄写者、更に校訂年月日、校訂者などが書き添えられている。

この写本は名古屋市役所所蔵の「維新雑記 九」を謄写したもので、震災時には維新史料編纂会事務局に貸出中で、金庫中に保管されていたために難を逃れ、市史編纂係に返却されたものであるという。震災を生き延びた、まさに「記念」すべき写本なのである。「返送ヲ受ケテ即時」にその旨を記しているところに、堀田の心境が吐露されている。「異船渡來記録」の表題を持つ写本は全部で五冊あり、これらも同様の経過を辿つたものと考へてよい。この五冊の写本だけは、表紙が他の写本よりも薄く、これ以外に震災前に謄写された写本は現存しない。

大正十年三月 堀田璋左右

堀田璋左右



#### 「異船渡來記録」

まず堀田の記事か

ら見てみよう。

#### 「異船渡來記録」

いま一つの写本「異國船渡來見聞録」も、まず堀田の記載から見ていこう。

#### 「異國船渡來見聞録」

いまと一つの写本「異國船渡來見聞録」も、まず堀田の記載から見ていこう。

今やらねば折角少しでも残つて居る資料が散逸してしまい、再び手

右以名古屋市役所々  
藏本令謄写加一校畢  
維新雑記 全十二冊 市立名古屋図書館所蔵

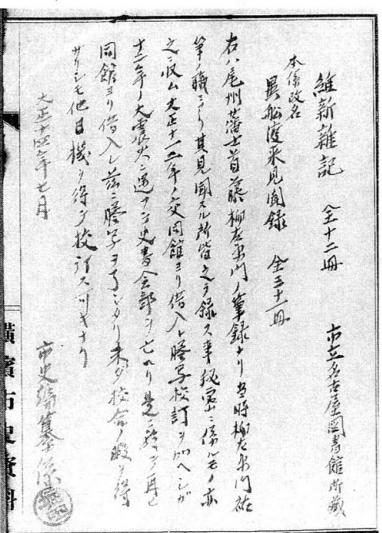
大正九年九月一日  
返送ヲ受ケテ即時  
堀田璋左右識  
大正十四年六月十六日返送ヲ受ケテ即時  
堀田璋左右識  
大正十二年九月一日ノ震災ニ遇ヒシモ、金庫中ニ在リテ幸ニ焼失ヲ免カレタリ、本係ニ於テハ数多ノ史料ヲ失ヒ、今ハ當時ノ残存品ヲ藏スルモノ極メテ寡シ、乃チ本書ヲ珍藏トシテ以テ記念トナス

本係改名 異船渡来見聞録 全三十一冊

右ハ尾州藩士首藤柳左衛門ノ筆録ナリ、當時柳左衛門祐筆ノ職ニアリ、其見聞スル所皆之ヲ録ス、事秘密ニ係ルモノ亦之ニ收ム、大正十二年ノ交、同館ヨリ借入レ譲写校訂ヲ加ヘシガ、十二年ノ大震火ニ遇フテ史書全部ヲ亡ヘリ、是ニ於テ再ヒ同館ヨリ借入レ茲ニ譲写ヲ了シタリ、未ダ校合ノ暇ヲ得サリシモ他日機ヲ得テ校訂ス可キナリ

大正十四年七月 市史編纂係（堀田印）

「(横浜) 市史稿写本」



「異国船渡來見聞録」

から七月まで五ヶ月間で譲写したと考えれば、一ヶ月平均六〇〇枚、一日にして約二〇枚以上の譲写を行つた計算になる。

各月の譲写生・枚数などを記録し

た「大正一四年度譲写記入簿」(横浜市史編集室所蔵)によれば、大正一四年四月から七月にかけて、筆耕・譲写を担当していた譲写生は一ヶ月に六名ないし七名おり、「異国船渡來見聞録(維新雑記)」のほか、「神奈川武鑑」「吉川弥平次文書」などを譲写、四ヶ月間の合計枚数は七八〇〇枚以上に及んだ。各人で枚数のばらつきは大きく、少ないもので一ヶ月に三〇枚、多いものになると一二〇〇枚を越えた例もあるから驚きである。震災による資料の焼失という事態が、残された資料の記録化・歴史編纂に向ける彼らの情熱につきである。震災による資料の焼失と

「異国船渡來見聞録」を名古屋図書館から借り入れたのは大正一四年二月末頃と推測される。「異国船渡來見聞録」は全三一冊で、一冊平均四〇〇字原稿が一〇〇枚程度なので、

合計すると約三〇〇枚以上。三月

### 「市史稿写本」の行方

さて「市史稿写本」は昭和二年段階では約一三〇〇冊を越えていたよ

うであるが、現在当館所蔵の「市史稿写本」は約六五〇冊で半数が組織変更や被災など何等かの理由で散逸したものと考えられる。ここで「横浜市史稿」刊行後、市の歴史編纂事業及びそれに伴う史料調査業務の展開と、

「市史稿写本」の行方を、簡単に追つてみることにしよう。

「横浜市史稿」刊行後、それまでの市史編纂係が行つてきた「市史料調査」は、昭和九年に発足した横浜史料調査委員会が担うこととなる。同委員会は市の文書課に所属し、市史編纂係のメンバーの約半数が参加した。その後同委員会は、震災記念館を増改築して市民博物館がオープンした翌年(昭和一八年三月)に、博物館評議員会として発展的解消を遂げる。市民博物館は戦時下の昭和一九年一一月に休館となるが、この間の「市史稿写本」の所在は全く不明である。恐らく博物館開館以後は、同館に収蔵されていたと思われる。

「市史稿写本」が戦災を生き延びることができたのは、言うまでもなく関係者の尽力に依るところが大きい。さきに見た「異国船渡來見聞録」三冊の場合、市民博物館館長の中道等が戦災を避けるために自宅へ避難させており、戦後復活した史料調査委員会に無傷で返還されている。

「異国船渡來見聞録」をはじめ、市民博物館に所蔵されていた資料の多くは、昭和二三年市の教育局社会教育課に新たに設置された史料調査委員会が引き継いだのである。

復活した史料調査委員会の業務は、昭和二五年には臨時文教部生活文化課調査係が担当することとなつた。同課では、昭和三四年の開港百年記念に向けて「開港百年史」編纂を企画、収集資料を「横浜史料目録」にまとめている。ここには、現在当館所蔵の「市史稿写本」が「古文書」として列挙されており、勿論「異船渡來記録」「異国船渡來見聞録」も確認できる。

このように戦後、一時社会教育部局に所属していた歴史編纂及び「市史料調査」業務は、昭和二六年市民局、二七年総務局へと移り、「開港百年史」の前段として「横浜歴史年表」を昭和二八年に刊行した。「開港百年史」はその後「横浜市史」へと様相を変え、昭和二九年に市史編集室規程が定められ、以後二八年間にわたり通史編五卷九冊、補卷一冊、資料編二一卷二三冊、索引一冊、合計三四冊に及ぶ「横浜市史」が刊行された。この編纂過程で収集された資料をもとに、昭和五六年に横浜開港資料館が設立された。「市史稿写本」は、旧横浜市史編集室が収集した他の膨大な資料群とともに開港資料館に移管され、現在に至っている。

# 「咸臨丸太平洋を渡る」展から ブルック大尉の横浜日記

前回の企画展「咸臨丸太平洋を渡る」では、咸臨丸の乗組員たちのうち、木村喜毅、勝海舟、ジョン万次郎、福沢諭吉らに焦点をあてたが、横浜から咸臨丸に乗り込んだ米海軍のジョン・M・ブルック大尉の貢献も忘れるわけにはいかない。ブルックは航海日誌や、それに先立つ横浜滞在中の日記を残していて、貴重な記録となっている。

ブルックの「横浜日記」と「咸臨丸日記」は、「万延元年遣米使節史料集成」第五卷（一九六〇年刊）に収録されている。ブルックの孫にあたるジョージ・M・ブルック二世（ヴァージニア・ミリタリー・インスティチュート教授）が手書きの日記を解説・編集し、それを福沢諭吉の子孫にあたる清岡映一氏が邦訳したものである。しかし「横浜日記」は横浜滞在の途中からで、それ以前の日記は無いものと考えられている。

その後、一九八六年にブルック教授によって John M. Brooke's Pacific Cruise and Japanese Adventure (ジョン・M・ブルックの太平洋航海と日本の冒険) が上梓された。この本は、ブルックが一八五八年九月に測量艦フェニモア・クーパー号の艦長としてサンフランシスコを出港するところから、約半年の横浜滞在を経て咸臨丸でサンフランシスコに帰港するまで、およそ一年半にわたるブルックの日記を編集し、解説をつけたものである。

この本には前記の「史料集成」に

欠けていた横浜滞在当初の二ヶ月の日記が収録されている。咸臨丸関係というばかりでなく、開港直後の横浜滞在記としても貴重な記録なので、日記に沿ってかいづまんでも紹介しよう。

## 横浜到着

一八五九年八月六日。この日の朝、ブルックが指揮するフェニモア・クーパー号は石廊崎を過ぎて下田沖に停泊した。役人がオランダ語通訳を伴つて船を訪れた。どこから来たか、行き先は、乗船者は何人か、等々質問攻めにする。乗組員はブルック艦長以下総勢二二名。それにハワイから乗せた漂流民の政吉（ティム）がいた。ブルックはかれを故郷に送り届けようとしていた。ブルックと製図士のカーンは上陸して下田を見物する。

八月七日。カーンや政吉らと上陸し、買い物をする。

八月九日。下田で買い物をする。

八月一二日（安政六年七月十五日）。クーパー号は観音崎を通過し、昼過ぎに神奈川に碇泊。ロシア軍艦ノーヴィック号士官の訪問をうけた。午後、ブルックとカーンは上陸して神奈川のアメリカ領事館（本覚寺）にドール領事を訪ね、ジョセフ・ヒコ（浜田彦藏）と再会する。

漂流民だったヒコはサンフランシ

スコからクーパー号に乗組み日本に戻ろうとしていたが、船酔いに苦しめハワイで下船していた。その後アメリカ領事館の通訳となつて一足早く神奈川に着いていたのである。

八月十五日。ブルックらは上陸して一分銀に両替し、商店街をぶらつく。八月一七日。領事館に泊まった翌朝、ブルックとカーンはヒュースケンの案内で馬に乗つて江戸見物に出かけた。日本橋や大名屋敷のあたりをまわり、呉服屋で買い物も少々して、ブルックはカーンとともに馬で江戸に向かった。パスポート（江戸へ行くための外国人用の旅券）が用意されていた。留守はもう一人の士官ソルバーン大尉に託す。多摩川の渡しでパスポートを見せて舟で渡り、その後しばらく行ってから茶屋で一服する。ブルックは清潔できちんとした室内が気に入り、茶屋の人びとはブルックらの衣服に興味津津だった。

江戸の公使館（善福寺）ではハリスが函館駐在ロシア領事やロシア海軍士官と会食中だった。ハリスは新潟港や日本の西海岸の測量をブルックに頼みたかったのでクーパー号の到着を心待ちにしていたという。今季節に西海岸の測量は無理だが、神戸と周防灘の測量をしようとブルックは答えた。

## クーパー号の座礁

八月二三日。江戸からの帰路、大雨のため一夜足止めされたいたブルックとカーンは、夕方神奈川に着き、ただちにアメリカ領事館に行つた。

クーパー号が横浜で座礁したとの知らせをもららした。乗組員は上陸しかれらと備品を収容するため何軒かの家が提供されたという。二人は舟で横浜へ急行した。

ブルックはクーパー号のキャビンに下りてみると、浸水のため何も取り出せない。クロノメーターはほとんど無事であり、また乗組員も疲れきっているためブルックは作業を断念する。

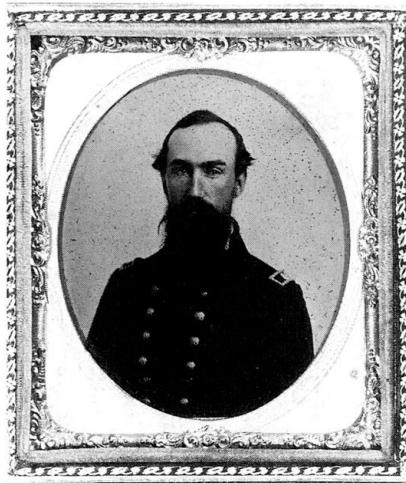
八月二三日。朝、潮は引き、船の水も引いた。書籍はダメになってしまったが、幸いにもこれまでの測量が最良の策だろとハリスは答えた。また、ロシア領事によれば、役人に

金や衣服などを全部取り上げられた漂流民がいたとのことで、ブルックは政吉をそんな目にあわせないよう最善を尽くそうと心にきめた。八月一七日。領事館に泊まつた翌朝、ブルックとカーンはヒュースケンの案内で馬に乗つて江戸見物に出かけた。日本橋や大名屋敷のあたりをまわり、呉服屋で買い物も少々して、ブルックはカーンとともに馬で江戸に向かった。パスポート（江戸へ行くための外国人用の旅券）が用意されていた。留守はもう一人の士官ソルバーン大尉に託す。多摩川の渡しでパスポートを見せて舟で渡り、その後しばらく行ってから茶屋で一服する。ブルックは清潔できちんとした室内が気に入り、茶屋の人びとはブルックらの衣服に興味津津だった。

江戸の公使館（善福寺）ではハリスが函館駐在ロシア領事やロシア海軍士官と会食中だった。ハリスは新潟港や日本の西海岸の測量をブルックに頼みたかったのでクーパー号の到着を心待ちにしていたという。今季節に西海岸の測量は無理だが、神戸と周防灘の測量をしようとブルックは答えた。

ブルックはまた政吉の送還についてハリスに相談している。ブルック自身が政吉を神戸まで送り届け、報酬を払つて解雇し、現地の役人にそれを取り上げないよう約束させるのが最良の策だろとハリスは答えた。

ブルックがドール領事とともに奉



ブルック大尉の肖像写真。木村摂津守に贈られたもの。木村家蔵・当館保管

行を訪ねると、奉行は繰り返し援助を申し出た。事故はブルックが江戸に出かけた留守中に起こり、その間にソルバーン大尉が停泊地を移動していたのであったが、それでも停泊中に座礁するという事態はブルックにとってはなかなかつらいことであつた。

### ロシア軍人殺傷事件

八月二五日（陰暦七月二七日）の夕刻、横浜ではロシア人殺傷という最初の攘夷事件が発生した。ブルックも事件に関係したのだが、残念ながら日記はこの数日が空白になつてゐる。他の史料によれば事件はつぎのようなものだった（『通信全覧』、『アメリカ彦藏自伝』、英國議会文書など参照）。

その日、ロシア使節ムラヴィヨフに随行して品川に停泊していたロシア艦隊から、士官二名、水夫二名の四人が食料などの買出しのため横浜にやってきた。一人が本町三丁目の青物屋で買いたい物を終えて出てきたところ突然襲われたのである。かれは腕を切られ、逃げ込んだ。仲間の水夫は即死、士官は重傷を負つた。

八月二九日。ポポフ提督が船大工を連れて来訪し、クーパー号を調査した。ブルックは大幅な修理が必要になるのではないかと危惧しはじめ

たのは翌日早晨になつてからのことであった。

このときの神奈川奉行（外国奉行の兼帶）のひとりが水野忠徳である。水野は前年の九月に遣米使節に任命され、この攘夷事件のため籠免され、遣米使節からもはずされることになつたのである。

八月二六日。ブルックはクーパー号から引き揚げた器具の修理などにわわた。奉行を訪ね、事件現場に残されていた刀の破片を見る。奉行はカリフォルニア、ハワイ、パナマ、ニューヨークなどへの航海日数についてブルックにいろいろ尋ねた。

八月二七日。ロシア艦隊のポポフ提督が江戸から来て、ムラヴィヨフ使節からの謝意をブルックに伝えた。夕刻、ロシア士官・水兵の葬儀が行われ、ブルックやソルバーンも参列した。ポポフ提督はクーパー号の修理に助力を申し出た。

八月二九日。ポポフ提督が船大工を連れて来訪し、クーパー号を調査した。ブルックは大幅な修理が必要になるのではないかと危惧しはじめ

負つた。一足先にボートに戻つて、士官一人だけが難をのがれた。

すぐに現場に駆けつけたブルックは部下を呼びにやり、重傷の士官と水夫の遺体を自分の仮宿舎に運ばせた。絶望的とみられた重傷の士官は四時間ほど生存し、もう一人の士官に一部始終を伝えた。日本の役人が神奈川の外国領事館へ事件を知らせたのは翌日早晨になつてからのことであった。

このときの神奈川奉行（外国奉行の兼帶）のひとりが水野忠徳である。水野は前年の九月に遣米使節に任命され、この攘夷事件のため籠免され、遣米使節からもはずされることになつたのである。

### 咸臨丸乗組員の子孫たちが集合

「咸臨丸太平洋を渡る」展会期中の九月二十四日（日）、咸臨丸乗組員の子孫三三人が開港資料館に集まつた。

六年前に発足した「咸臨丸子孫の会」が、展示を機会に三回目の会合を開いたもので、木村摂津守、勝海舟、佐々木、倉桐太郎、鈴藤勇次郎、浜口興右衛門、小野友五郎、

展示を見る子孫たち

子孫と関係者で記念撮影

八月三〇日。昨日につづき、ロシア人大工や水兵の助力を得て、クーパー号の破損調査作業が行われた。ポポフ提督の意見では、木材を取り替えるべきではない個所が多いすぎ、修理する価値はない、という。

八月三一日。役人がブルックを訪れ、政吉が淡路に戻る許可が下りたことを伝えた。

九月四日。クーパー号乗組員のけんか騒ぎがあり、止めに入ったブルックのピストルが暴発し、一人が重傷を負つた。ドクター・ホールと領事を呼ぶ。

九月五日。一日中、海軍長官への報告書を書く。

九月一八日。ウォンダラー号のキ

ング船長がブルックを訪れる。キンギによれば、クーパー号はかれのおじが造らせた船だが、他の船の木材を廃物利用して建造した船であり、それをアメリカ政府が買ったのだとういう。ブルックはクーパー号の状態が悪い理由に納得する。

九月一九日。ピストルで怪我をした乗組員の容態が悪化し死亡。

このあと一〇月九日まで日記は残っていない。再開された日記は『遣米使節史料集成』に収録されたとおりである。港の測量をしたり、遣米使節の航路について助言したりしながら便船を待っていたブルックに咸臨丸同乗の白羽の矢がたてられるのである。（伊藤久子）

5

# 搖籃期の石鹼工業 —堤家文書の中から—

平成一二年（一〇〇〇）三月、磯子区の旧家堤家から約三〇〇〇点の資料が寄託された。これらの資料は、堤家に代々伝存したもので、江戸時代中期から明治一二〇年代に至る長期にわたるものである。

当館が、堤家資料の整理を始めてから、すでに十数年の歳月が流れている。この間、当館では先代の御当主芳正氏の協力を得て、資料の整理をおこない、今回、寄託を受けた資料については目録（『横浜市史料所蔵目録』一二編）を刊行し、閲覧室で公開している。

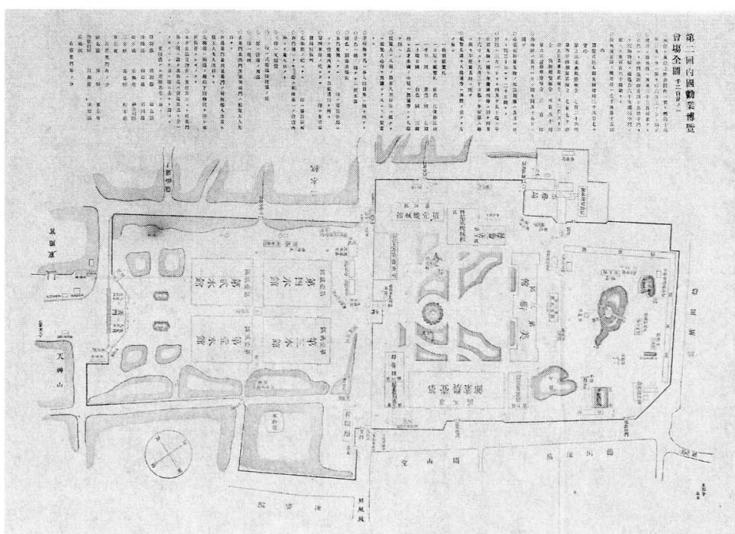
また、平成一二年五月には、現在の御当主である真和氏より約一万点の未整理資料をお借りし、これらの資料についても整理が進められた。さらに、この資料も、整理が終了次第、寄託されることになつてい

ところで、堤家資料の中には、堤家一〇代当主磯右衛門に関する資料が多く含まれている。彼は、明治六年（一八七三）に日本で最初に石鹼製造に成功した人物として名高く、彼が経営していた「堤石鹼製造所」は明治初期から中期にかけて日本を代表する企業であった。

そのため、当館では、磯右衛門の活動を、展示や出版を通じて広く紹介してきた。しかし、石鹼製造所の経営実態については、分からぬ点多く、この点を解明することが今後の課題になつていて。今回、真和氏より借用した資料には石鹼製造所



①海運会社で使用された堤石鹼



②内国勧業博覧会場図面

新たに借用した資料の整理が終了するのは数年先のことであるが、ここで一般公開に先立ち、未整理資料の中から、いくつかの石鹼製造に関する資料を紹介したい。

新たに借用した資料の整理が終了するのは数年先のことであるが、ここで一般公開に先立ち、未整理資料の中から、いくつかの石鹼製造に関する資料を紹介したい。

新たに借用した資料の整理が終了するのは数年先のことであるが、ここで一般公開に先立ち、未整理資料の中から、いくつかの石鹼製造に関する資料を紹介したい。

新たに借用した資料の整理が終了するのは数年先のことであるが、ここで一般公開に先立ち、未整理資料の中から、いくつかの石鹼製造に関する資料を紹介したい。

新たに借用した資料の整理が終了するのは数年先のことであるが、ここで一般公開に先立ち、未整理資料の中から、いくつかの石鹼製造に関する資料を紹介したい。

新たに借用した資料の整理が終了するのは数年先のことであるが、ここで一般公開に先立ち、未整理資料の中から、いくつかの石鹼製造に関する資料を紹介したい。

内国勧業博覧会場の図面

内国勧業博覧会場の図面

内国勧業博覧会場の図面

内国勧業博覧会場の図面



③堤石鹼商標



④明治17年（1884）に登録された商標

年代、政府は精力的に殖産興業政策を展開していくが、こうした政策のもと、各地で博覧会が開催された。農産物などが出品され、多くの人々が会場を訪れることになった。

磯右衛門は、博覧会出品者の常連であり、堤家には博覧会に関する資料が多数残された。なかには、良質な石鹼を製造したことを見せるメダルや賞状、出品目録や会場で販売した石鹼の精算書などもある。また、会場の図面もあり、②は、その内の一枚である。

この図面に描かれた第二回内国勧業博覧会は、明治一四年（一八八一）に開催された。会場の図面もあり、②は、その内の一枚である。

この図面に描かれた第二回内国勧業博覧会は、明治一四年（一八八一）に開催された。会場の図面もあり、②は、その内の一枚である。

堤家資料の中には、多くの商標が含まれている。石鹼を販売するにあたっては、美しい商標を付けることによって、売り上げを伸ばすことができる。また、他店の類似品や輸入石鹼と区別する意味もあり、磯右衛門が品質に自信を持っていたことの証拠でもある。

#### 商標の種類は、

現在、確認されているだけでも十数種類にのぼり、製品の種類ごとに別々の商標が付けられていたようである。

#### インドで販売された堤石鹼

今回、借用した未整理資料の中から、磯右衛門が、明治一八年（一八八五）にインド人の商人と交わした一通の契約書が見つかった。この契約書は、カルカッタに住むマーチソンという人物にインド国内での堤石鹼の独占販売を認めるというものであつた。

⑤は、この時に作成された契約書の原本で、マーチソンと磯右衛門が署名したものである。契約の場所は

年代、政府は精力的に殖産興業政策を展開していくが、こうした政策のもと、各地で博覧会が開催された。農産物などが出品され、多くの人々が会場を訪れることになった。

磯右衛門は、博覧会出品者の常連であり、堤家には博覧会に関する資料が多数残された。なかには、良質な石鹼を製造したことを見せるメダルや賞状、出品目録や会場で販売した石鹼の精算書などもある。また、会場の図面もあり、②は、その内の一枚である。

この図面に描かれた第二回内国勧業博覧会は、明治一四年（一八八一）に開催された。会場の図面もあり、②は、その内の一枚である。

堤家資料の中には、多くの商標が含まれている。石鹼を販売するにあたっては、美しい商標を付けることによって、売り上げを伸ばすことができる。また、他店の類似品や輸入石鹼と区別する意味もあり、磯右衛門が品質に自信を持っていたことの証拠でもある。

#### 商標の種類は、

現在、確認されているだけでも十数種類にのぼり、製品の種類ごとに別々の商標が付けられていたようである。

#### インドで販売された堤石鹼

今回、借用した未整理資料の中から、磯右衛門が、明治一八年（一八八五）にインド人の商人と交わした一通の契約書が見つかった。この契約書は、カルカッタに住むマーチソンという人物にインド国内での堤石鹼の独占販売を認めるというものであつた。

⑤は、この時に作成された契約書の原本で、マーチソンと磯右衛門が署名したものである。契約の場所は

字を配したデザインは、高級品をイメージさせます。

ところで、こうした商標の専用使用権を政府が保護し始めたのは、明治一七年（一八八四）のことであった。

この年、政府は「商標登録所」を農商務省に設置し、この役所で「登録商標」の管理をおこなうことになった。これにより、登録申請者以外の商標使用が禁止された。

堤石鹼の場合、すべての商標を登録したわけではないが、制度が作られた直後に④の商標を登録している。

この時、さまざまな商品の商標登録が行われたが、石鹼については、この商標が日本最初の「登録商標」である可能性が高い。

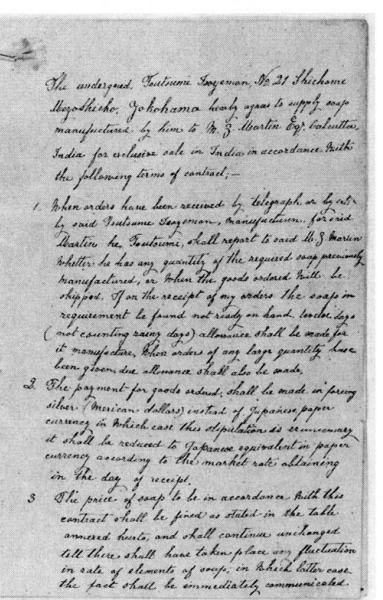
横浜と考えられ、来日したマーチソンが、堤石鹼の評判を知り契約に及んだのかもしれない。

契約書には、インドから電報か手紙で注文を出すこと、販売にあたってはマーチソン・カンパニーの張り紙を付すこと、運送の途中で問題が起きた時の損失負担などについて、英文で記されている。

はたして、どれほどの量の石鹼が

インドに送られたのか、今のところ不明であり、この点については今後、帳簿などの整理が進む中で分かってくるものと期待している。

以上、堤家から借用した資料を数点紹介したが、今回、借用した資料の中には破損の著しいものが多く、整理を完了するには数年の時間が必要である。また、ここで紹介した資料も含め、これらの資料を閲覧室で公開できるようになるのも数年先と考えている。利用の方々には、ご迷惑をおかけしてしまうが、ご理解を得られれば幸いである。



⑤インド人と交わした契約書



# 新聞万華鏡③

## 商況を報せる新聞

生糸日報

明治時代の横浜では生糸貿易が盛んでした。明治時代のはじめまで生糸貿易商は、生糸の产地や得意先に書簡で横浜の商況を報せていました。明治一〇年代になると、一枚または二枚の印刷された商況報告を発行するようになります。また、明治二〇年代になると、商況報告以外の記事も載せた新聞が発行されました。

当館では、それらの新聞を収集しています。今回はその中から、横浜最大の貿易商であった原合名会社の発行した『生糸日報』を紹介します。

埼玉県の農家に生まれた原善三郎は、文久元年（一八六一）から横浜で生糸の売込みを始め、翌年本町三丁目に生糸売込業「亀屋」を開業します。そして、短期間で莫大な利益をあげ、横浜を代表する生糸貿易商に成長しました。善三郎が明治三年（一八九九）に亡くなるとその事業を継いだのが、三溪園で有名な富太郎です。彼は、原商店を原合名会社に改組し、生糸部のほかに輸出部を創り、モスクワ・リヨン・ニューヨークに代理店を開設しました。他に、製糸部、地所部も営業していました。『横浜市史』第四巻によれば、原合名会社の生糸取扱高は、横浜輸出生糸総額のうち明治三六年には一割強、明治四四年には二割強にあたる量だったようです。

『生糸日報』は、原合名会社が経営する生糸日報社（弁天通三丁目四番地）が、明治三一年一月に創刊

年代になると、商況報告以外の記事も載せた新聞が発行されました。当館では、それらの新聞を収集しています。今回はその中から、横浜最大の貿易商であった原合名会社の発行した『生糸日報』を紹介します。

埼玉県の農家に生まれた原善三郎は、文久元年（一八六一）から横浜で生糸の売込みを始め、翌年本町三丁目に生糸売込業「亀屋」を開業します。そして、短期間で莫大な利益をあげ、横浜を代表する生糸貿易商に成長しました。善三郎が明治三年（一八九九）に亡くなるとその事業を継いだのが、三溪園で有名な富太郎です。彼は、原商店を原合名会社に改組し、生糸部のほかに輸出部を創り、モスクワ・リヨン・ニューヨークに代理店を開設しました。他に、製糸部、地所部も営業していました。『横浜市史』第四巻によれば、原合名会社の生糸取扱高は、横浜輸出生糸総額のうち明治三六年には一割強、明治四四年には二割強にあたる量だったようです。

『生糸日報』は、原合名会社が経営する生糸日報社（弁天通三丁目四番地）が、明治三一年一月に創刊

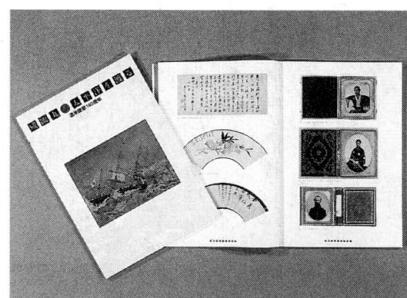
した毎夕発行の夕刊新聞です。明治三二年から三五年までの同紙を見る限り、発行人は原合名会社生糸部副支配人の浅見七郎、編集人に横浜通信社長の日比野重郎（明治三四年八月八日まで）、印刷人には南中舎の藪覚次郎が名を連ねています。定価は、一枚一錢、一ヶ月二〇錢でした。

『神奈川県統計書』によれば、発行部数は明治三三年に約一〇五万部で、その後毎年増加し、明治四二年に約一五〇万部になっています。翌年からは減少し、大正二年には約四八万部になりました。

紙面は四頁で、内容は海外の通信社から得た海外情報や市況、横浜での生糸の商況、外国為替相場などとなっています。特に、横浜での生糸取引の様子については、「生糸手合」、「取引結果」、「破談引戻シ」など、見本の持ち込みから取引終了までの記録を掲載しています。取引をした商社、生糸貿易商、生産者、生糸の種類、取引量などがわかります。生糸の产地については、神奈川県、群馬県、埼玉県、山梨県、島根県など日本全国の工場から集荷していたこともわかります。また「同伸の商談」、「英一番の商談」など、各商社がどのような取引をしたかをまとめて掲載することもありました。広告も生糸運搬用の袋や生糸関係の機械等、実用的なものが多くなっています。

（上田由美）

### 資料館より



▲新刊のご案内

「咸臨丸 太平洋を渡る—遣米使節140周年—」展図録

A4判64ページ（内カラー8ページ）、定価1,000円（税込）当館・受付で販売中

- ・受講料 500円（展示観覧料を含む）
- ・募集人員 80名（多数の場合抽選）
- ・応募方法 往復ハガキに住所、氏名、電話番号を明記のうえ11月7日までに（当日消印有効）、〒231-0021 横浜市中区日本大通3 横浜開港資料館講演会係へ（Tel201-2100）

▼出版

『横浜もののはじめ考』改訂版

「もののはじめ」の集大成として、昭和63年（1988）に刊行され、現在も好評を得ていますが、その後の調査・研究により、いくつかの新しい事実が判明したため、改訂したものです。

A4判188ページ（内カラー16ページ）、定価2,100円（税込）  
当館・受付で販売中

休館日等のお知らせ

月曜日および11月24日（金）、年末年始（12月28日（木）～平成13年1月4日（木））、1月9日（火）、1月30日（火）、2月13日（火）は休館させていただきます。

なお、閲覧室は、上記のほか、11月30日（木）、平成13年1月31日（木）、2月27日（火）～3月2日（金）も資料整理のため休室させていただきます。

▼展示

- (1)「歴史を集めつむぐ人々—横浜開港資料館の源流—」 11/1(木)～平成13年1/28(日)
- (2)「追憶の横浜—絵葉書による100年前の風景—」（仮称） 平成13年1/31(水)～4/22(日)

今から100年ほど前に誕生した絵葉書によって、関東大震災や戦災、戦後の開発で失われた20世紀初頭の横浜・神奈川の風景を再現します。

▼寄贈資料

- (1) 岡家資料 506点 内訳 文書405点、図書86点、新聞8点、雑誌7点（青葉区荏子田 岡信孝氏）
- (2) 昭和10年代の横浜風景絵葉書 12点（東京都大田区千鳥 望木周代氏）

▼講演会

「歴史を集めつむぐ人々—横浜開港資料館の源流—」展記念講演会

- ・日時 平成12年11月18日（土）、午後1時30分から（1時開場、1時30分開演）4時まで
- ・会場 横浜開港資料館・講堂
- ・講師及び演題

第一部 記念講演

海野福寿（明治大学教授）『横浜市史』編さんの頃

第二部 首都圏形成史研究会との共同シン